〈編集後記〉

粉川昭平先生を悼む



2001年5月19日県立自然博物館をつくる会・関西自然保護機構共催の講演会にて（山倉拓夫撮影）

関西自然保護機構の会員として，本機構の発展と近畿圏の自然保護に尽力された粉川昭平先生は，去る2001年10月25日（木）午前1時12分，74歳の生涯を閉じられました。謹んでご冥福をお祈り致します。

先生は1927年1月12日奈良県で誕生され，奈良県立中学校，第三高等学校（旧制），京都大学理学部（主として地質学鉱物学専攻），京都大学理学部地質学教室大学院（旧制）を卒業された。大学院では研究奨学生として御蓋山およびその周辺の地質の研究に没頭され，その研究成果を著書「奈良県三笠山およびその周辺の火山層序学的様相」（養徳社，1956年），地質学雑誌などの学術誌に取りまとめられた。

先生は1956年3月には大学院での研究奨学生を終了され，同年4月に大学院（旧制）に再入学された。また4月からは大阪市立大学理工学部応用植物学教室研究員となられたほか，立命館大学文学部地理学科および天理大学で非常勤講師として教壇に立たれた。1957年5月には，大阪市立大学に助手として採用され，理工学部勤務を命ぜられた。理工学部の理学部と工学部への分離に伴い，1959年4月には理学部勤務を命ぜられ，以後1964年に講師，1965年に助教授，1972年に教授に昇任された。1990年3月には定年により大阪市立大学を退官され，大阪市立大学名誉教授の称号を授与された。1990年4月には教授として千代田短期大学に赴任され，1999年には退官された。このように先生は62年の長きにわたり，その情熱を大学での教育と研究に注がれた。

大阪市立大学での先生は，メタセコイアの発見で高名な三木茂先生の指導を受けられ，地質学と植物学を融合させた古植物学の研究に邁進された。後期新生代の植物遺体の分類研究の発展に尽力され，学位論文（京都大学，1962年）となった「ミツガシワ種子遺体の分布と層位」の研究は，当該種の種子遺体の形態の時空的変遷，倍数性の進化，年代推定法への応用などを解明したもので，先生の代表的な研

究と言われている。「日本の後期新生代の古果実学の材料」（築地書館，1975）は，植物遺体分類の鍵を解説した実用性に富む高著として知られている（塚腰実・田村実，2001.「追悼，粉川昭平先生（1927-2001）」。日本植物分類学会ニュースレターNo. 3，15-16）。また，先生は考古学の分野でも多大な貢献をされた。多数の遺跡から出土する植物遺体を研究され，人と植物の関わりを歴史的に解明されたことは広く知られている。

先生は鉱物，植物，昆虫などの収集家でもあり，その膨大なコレクションは大阪市立自然史博物館の標本庫に収蔵され，現在その整理が計画されているという。先生のコレクションの一部は生きた植物標本として，大阪市立大学の構内に植えられているものもある。その一つにハマナツメがある。この種は既に大阪府では絶滅状態にあり，「改訂・近畿地方の保護上重要な植物」（レッドデータブック近畿研究会，2001）では絶滅危惧種Aに分類されている。この生きた植物標本も極めて貴重な先生の遺品である。ハマナツメを見るたびに先生のことが思い出されるが，最近この樹を増やすことを考えている。

（山倉拓夫・千地万造）